

インドネシア・ランポン州の農業

— 貧困の移殖 —

紙 谷 貢

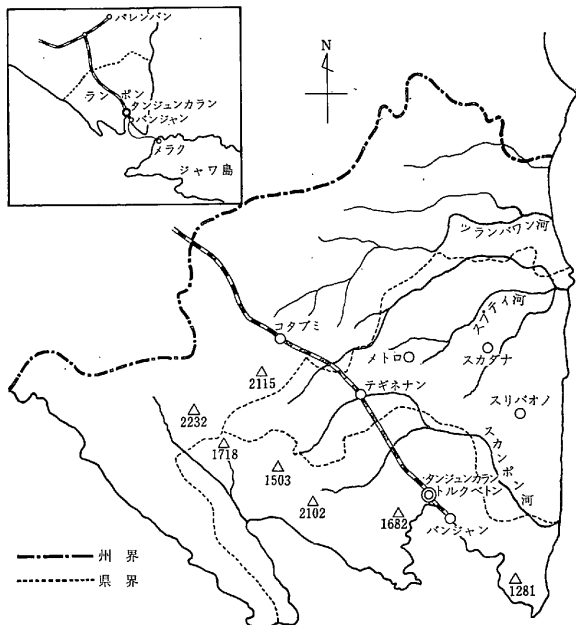
一、インドネシア経済とランポン州

総面積一九〇万四千平方キロ、赤道に沿って散在する大小三千余の島からなるインドネシアは、国土のわずか七%を占めるにすぎない二つの島、ジャワ、マドウラを除いては、ほとんど未開発の状態に置かれている。一九六九年にはじまった経済開発五ヵ年計画——通称 REPELITA (Rencana Pembangunan Lima Tahun)——にも、インドネシアのもつ経済的な潜在力の大きいことが強調されている。とくに未だ開発の進んでいない外島地区 Outer Islands (ジャワ、マドウラを除く諸島) における資源の積極的な活用が、REPELITA の重要目標で

ある輸出農産物および食糧作物の増産に、きわめて大きな役割をもつものと期待されている。また REPELITA は地域および村落開発計画を、国家開発計画と同一の重要性をもつものとしている。そのため、各村落 (Desa) に二〇万ルピア、各県に一人当たり一〇〇ルピアの補助金などの財政支出により、地域開発計画への地方官民の REPELITA への参加意識の向上を図っている。

スマトラ島の最南端に位置し、スンダ海峡を境にしてジャワ島に隣接するランポン州もまた、インドネシアの食糧増産、輸出作物増産のための重要な基地の一つとして期待されている地域である。ランポン州はその面積三万二八二一平方キロ(九州の総面積から鹿児島を除いた程度)、インドネシアの総面積の一・七%にすぎないし、また一九七〇年現在の人口は二六七万三千人で、これもインドネシアの総人口の二%強である。しかしインドネシアは、その外島地区のうち、スラウエシ島のマカッサル周辺、カリマンタン島のバリト河流域などとともに、このランポン州を食糧生産基地の一つとし、REPELITA の灌漑投資計画のうち、灌漑施設の拡張分四三万ヘクタールのなかに、ランポン州のブンゲールウタラ、スプティ河などの灌漑計画約六万ヘクタールを含めている。事実、最近五ヵ年間のランポン州における水稻收穫面積の増加は年率四・七%を記録し、

ランボン州略図



《ノート》 インドネシア・ランボン州の農業

一三六

ジャワ、マドウラの二・二%をはるかに上回る。とくに一九六八年以降の上昇傾向は著しい。

このような水稻收穫面積、したがって水田(のりまき)面積の拡大は、一九五〇年代からの積極的な移民政策との関連ですすめられた灌漑事業が、一九六〇年代末にはほぼ完成した結果であり、このような灌漑事業による耕地の拡大が、移民の流入を促進した。そして、新たな灌漑投資の拡大は、この地域の雇用機会の増加をさらに期待させるものである。さらに、近年P・T・ミツゴロ(一九六九年四月事業開始)、P・T・シンガラガ(一九六九年十一月事業開始)などの企業による農園開発(いずれともうちこの生産を主たる目的とする)が進むにつれ、農場自体での雇用のみならず、道路の整備等に伴って、次第に周辺に就業の機会

第1表 ランボン州における人口の増加

	人 口 (人)			増 加 率 (%)	
	1961	1965	1970	1965/1961	1970/1965
南部ランボン	819,293	1,029,364	1,258,408	125.6	122.3
中部ランボン	514,084	636,723	959,220	123.9	150.6
北部ランボン	334,134	432,563	455,503	129.5	105.3
計	1,667,511	2,098,650	2,673,131	125.9	127.4

が増大して来た。これらの動きは、ジャワ島などの人口稠密地帯からの移民の流入に対して大きな刺激となっており、ランボン州の人口は過去五年間に二七%、年率にして五・〇%の増加を記録している。中でも開発投資が集中している中部ランボンでは、年率八・五%という高い人口増加率が示されている(第一表)。もっとも一九五〇年から一九六八年までの一九年間に、ジャワ島、バリ島などからの外島地区への移住者の世帯数は九万九五一〇に達しているが、そのうちランボン州に移住したものは五万二二三三、すなわち全体の五三%。その他のスマトラ地区三万七七一、三二%となっており、スマ

ラ島、なかんずくランボン州は最も移住者を受け入れ易い条件を備えた地区であったと言えようし、また最近の中部ランボンへの投資が、移住の集中化をもたらしていると言えるであろう。上記のようなジャワ、バリなどの島々からの移住者は、資本も技術もたない農民であり、彼等の大部分は自給的な農業を営む。したがってその生産性の向上には大きく寄与することはなかったが、食糧生産の増大と、コーヒー、ココナツ、こしょう、タバコなどの住民農業 small holders による生産の増大が、耕地の拡大と労働力の増大に伴って結果することとなった。このような生産の増加傾向は城内市場の拡大、したがって商品流通を促進するし、投資の増大に伴う資本財の流入もあって、城内への物資の移輸入量は急速に増大している。パンジャン港における輸入実績によれば、一九六九年に六〇万ドルにまで陥ち込んだ輸入額は、一九七〇年には一二万ドル、一九七一年上期には一九三万ドルへと急速に上昇傾向を辿っている。このような輸入の増大は、ランボン州における経済の規模の拡大を物語るものであるが、物資流通の活発化に伴って、州都タンジュンカラ、それに隣接するトルクベトン、それに唯一の港であるパンジャンなどの都市領域の拡大は顕著である。

最近とみに経済活動の活発化が見られるランボン州は、インドネシア全体に対して、土地面積、人口、何れも二%前後の比

第2表 インドネシア農業におけるランボン州の地位¹⁾
 —1960年価格による農業生産額の比較—

(単位: %)

	1965	1967	1969	1970
食糧作物 ²⁾	2.30	1.75	1.83	1.98
商品作物(住民農業) ³⁾	2.18	2.50	2.67	-
商品作物(農園) ⁴⁾	1.51	1.81	1.61	-
計	2.18	1.94	1.99	-
人 口	1.72	1.96	2.27 ⁵⁾	-
1人当たり農業生産額	1.27	0.99	0.88	-

- 注 1) インドネシア全体の生産額に対するランボン州の生産額の割合。
 2) 米、とうもろこし、キャッサバ、甘藷、落花生、大豆。
 3) ゴム、コブラ、コーヒー、カボック、茶、タバコ、砂糖、こしょう。
 4) 砂糖、ゴム、コーヒー、茶、パームオイル、パーム核。
 5) ランボンの人口は1970年の人口を用いた。
 2) 算出の基礎として中央統計局の国民所得資料を用い、各年次の1960年価格表示の作物別生産額に生産数量の割合を乗じてランボン州の生産額を算出した。
 1969年以降は1968年を基準として生産量の伸びによって推計した。
 Biro Pusat Statistik, *Pendapatan Nasional Indonesia 1960~1968*,
 Djakarta 1970. 参照。

重をもつにすぎないが、国内総生産の面でもその寄与率は二%にみたないものと推定される。州別に生産所得を考察する資料には欠けるが、人口の八割近くが生活と雇用の場としているランボン州農業の総生産額は、インドネシアの農業総生産額の二%を占めるにすぎない³⁾。しかも最近における経済の拡大傾向にもかかわらず、その相対的地位は一向に向上していない。のみならず人口の増加によって一人当たりの所得水準は、相対的にはむしろ低下していると見なければならぬであろう(第二表)。

ランボン州の経済はもっぱら農業に依存しており、その中でも食糧作物生産の比重が高く、一見インドネシア全体の場合とほぼ同じような構成をとっている。この限りではランボン州農業はインドネシア農業のミニチュア的な存在とも言えようが、最近においては、漸次食糧生産の比重を減じ、住民農業による輸出作物生産の比重を増大させて来たことは注目すべき点である。また食糧作物の比重の減少は、米、キャッサバの相対的減少によるもので、最近輸出需要の増大しているとうもろこしは、逆にその比重を増大させているのである(第三表)。

このようにランボン州農業は、その生産の規模を拡大させながら、輸出作物への重点移行の傾向を示しはじめているが、土地利用の現況からみると、この傾向は一層推進されるものと思われる。すなわち、第四表に示されるように、ランボン州では、

第3表 農業生産額の構成

(単位: %)

	インドネシア			ランポン州			
	1965	1967	1969	1965	1967	1969	1970
食糧作物	65.8	64.8	67.1	69.4	58.4	61.6	60.5
うち 米	37.6	39.5	43.7	41.7	40.6	38.8	38.8
とうもろこし	5.8	5.9	5.3	5.3	4.1	5.4	5.7
商品作物(住民農業)	22.8	24.9	22.3	22.7	32.1	29.8	31.5
商品作物(農園)	11.4	10.3	10.6	7.9	9.5	8.6	8.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注. 第2表に同じ.

第4表 ランポン州における土地利用

—インドネシア全体ならびにジャワとの比較—

	ランポン州		インドネシア		ジャワ, マドウラ		A/B
	面積 (A)	割合	面積 (B)	割合	面積	割合	
	千ha	%	百万ha	%	百万ha	%	%
1. 林地	1,600	48.7	121.8	63.9	3.0	22.6	1.31
2. 農用地	386	11.7	22.1	11.6	8.8	67.0	1.75
(1) 住民農業用地	221	6.7	20.4	10.7	8.2	62.2	1.08
稲作地	59	1.8	6.1	3.2	3.8	28.8	0.97
その他	162	4.9	14.3	7.5	4.4	33.4	1.13
(2) エステート用地	165	5.0	1.7	0.9	0.6	4.8	9.71
3. その他 ¹⁾	1,296 ²⁾	39.5	46.5	24.5	1.4	10.4	2.79
合計	3,282	100.0	190.4	100.0	13.2	100.0	1.72

注. 1)は草地, 沼沢, 道路, 集落を含む.

2)は林木, かん木, アランアラン草原などの混在した原野を含む.

草地、沼沢等に分類される土地の面積が総土地面積の四〇%にも達している。これはジャワ、マドウラはいうまでもなく、外島地区の平均値よりもはるかに高い。しかもこの中のアランアラン (Alang-Alang) 草原やかん木林だけを取り出してみても、土地総面積の三七%にも達するのである。このことは土地そのものに開発の余地がなお大きく、他の外島地区に比しても有利な条件をもっていることを意味しよう。さらに稲作地ならびに畑作地を含めた住民農業用地の割合の低さは、人口の増大とともに今後その比重もまた高まる可能性を示し、しかも食糧需給の

第5表 主要商品別輸出実績（パンジャン港）

	輸 出 量						輸 出 額 1970	
	1965	1966	1967	1968	1969	1970	金額 (千ドル)	割合 (%)
ゴム(トン)	53.1	44.7	44.5	50.5	53.9	42.1	12,970	36.9
コーヒ(トン)	33.2	28.6	42.7	24.9	40.6	27.0	17,515	49.8
こし(トン)	11.0	13.3	29.3	20.8	10.9	1.3	1,507	4.3
とうもろこし(トン)	4.4	29.9	26.6	29.0	38.5	46.2	389	1.1
キャッサバ・チップ(トン)	9.2	2.8	2.7	15.0	45.3	73.5	1,434	4.1
コブ(トン)	2.6	4.9	4.3	4.2	3.6	5.8	148	0.4
ふすま(トン)	—	0.0	1.0	1.0	1.9	3.3	21	0.06
樹脂(トン)	—	—	0.5	1.6	3.7	3.2	62	0.2
木材(千m ³)	—	0.3	4.5	5.9	24.7	81.6	1,112	3.2
輸 出 総 額(千ドル)	—	32,277	38,796	33,581	38,571	35,174	35,174	100.0

出所：Perwakilan Departemen Perdagangan, Propinsi Lampung（ランボン州貿易省代表部）。

※ノート※ インドネシア・ランボン州の農業

動向から推して、また輸出作物の相対的有利性などから、今後作付の転換、多様化が予想されるからである。

なお、土地利用と農業生産額についてその構成を比較してみると、ランボンにおける住民農業による輸出作物の土地生産性は、インドネシアの平均をある程度上回っていることが知られるが、これに対して、エステートでの生産性は、他の地区に比しかなり劣っている。したがって、今後農園開発の推進とともに、エステートの経営、技術の改善に、一段の努力が必要とされていくと見られるのである。因みに最近のランボン州からの輸出の伸びを見ると、木材の輸出の伸びは最も目覚ましく、過去四年間に二七二倍に伸長した。しかしコーヒー、ゴムが輸出の中心であることには変わりなく、一九七〇年の輸出総額のうち、コーヒーは五〇%、ゴムは三七%を占め、ついで、こしゅう四%、木材三%、とうもろこし一%となっている。とうもろこしの輸出もここ数年間に急速に増大し、過去五年間に一〇倍に増加しているのである。これらの農産物、林産物等の輸出額は、一九六九年には、インドネシアの輸出総額（石油を除く）の六・二%を占めた。したがって輸出農産物の生産におけるランボン州の重要性和将来への期待は、食糧生産の側面での重要性和期待よりも大きいと言えるであろう（第五表）。しかし以下、貧困化の問題をかかえている住民農業について述べる。

注(一) Business News (Djakarta) 一九七〇年六月九日号。

(2) 一九六〇年価格による各作物(食糧作物、住民農業による商品作物、エステート作物)の生産額の集計値を比較したもの。

二、ランボン州農業の地域性

量的な観察からすれば、人口、耕地面積など、インドネシア全体の約二%の規模にすぎないランボン州は、農業生産額においてもほぼ全体の二%を占め、また農業生産の構成をみても、いわばインドネシア農業のミニチュア的な様相を呈している。しかし、土地利用の状況で見たように、ランボン州にはランボンなりの景観があり、さらにその内部には、自然的条件からの差異、したがって農業的景観の差異が明らかに指摘される。

州内の三県—Kabupaten Lampung Utara(北部ランボン県)、Kabupaten Lampung Tengah(中部ランボン県)、Kabupaten Lampung Selatan(南部ランボン県)—について、その作付パターンをみると、南部ランボンは商品生産にかなり傾斜し、中部ランボンは食糧生産を主体とすることが知られる。州全体の食糧作物作付面積のほぼ半分が中部ランボンに集中しているが、これと同様に、商品作物作付面積の半分は南部ラン

ボンに存在する。北部ランボンは、この点からみれば、ほぼ両者の中間的な性格と言えるが、むしろ南部ランボン型と言つてよいであろう。また南部ランボンを代表する作物は、水稻、陸稻、それにコーヒー、ココナツで、稲が作付総面積の四二%、コーヒー、ココナツが三五%を占める。北部ランボンでは、陸稻およびこしよが代表的な作物で、前者四二%、後者一七%という占有率を示す。これに対し、中部ランボンでは、陸稻の二八%を最高に、とうもろこし、水稻、キャッサバの順で、この四作物の作付合計面積は作付総面積の七九%に相当する(第六表)。

ランボン州では、コーヒー、こしよなどの商品作物は主として土着のランボン人によって栽培され、水稻作はジャワからの移住民によって行なわれている。したがって商品作物と畑作、水稻作と普通畑作という組み合わせに大別できるが、一般的に自給的色彩の濃い食糧作物生産の中でも、南部ランボンでは、水稻に重点が置かれ、かつかなりの商品化率を示している。すなわち、南部ランボン県農業事務所 Dinas Pertanian Rakjat, Kabupaten Lampung Selatan の資料によれば、南部ランボンでの米の商品化率は平均五〇%であつて、ランボン州の水稻作付面積の四九%が南部ランボンに集中している点や、その土地生産力が他の地区に比し高い点などを考えると、南部ランボ

第6表 ランボン州農業の多様性と地域性

—作物別作付面積(1970年)—

	南部ランボン			中部ランボン			北部ランボン		
	作付 面積	作付 割合	ランボ ン州に おける 比重	作付 面積	作付 割合	ランボ ン州に おける 比重	作付 面積	作付 割合	ランボ ン州に おける 比重
食糧作物	100,989	58.3	29.7	159,968	84.7	47.1	78,845	60.8	23.2
水陸両用稲	38,971	22.5	49.4	30,339	16.1	38.4	9,608	7.4	12.2
うるち	34,255	19.8	24.2	53,056	28.1	37.5	54,055	41.7	38.3
ジャコ	16,199	9.3	25.1	39,617	21.0	61.4	8,751	6.8	13.5
サバ	4,837	2.8	13.9	25,481	13.5	73.1	4,550	3.5	13.0
落花生	2,620	1.5	61.0	1,028	0.5	24.0	644	0.5	15.0
大豆	854	0.5	28.6	1,526	0.8	51.0	609	0.5	20.4
緑豆	3,032	1.8	25.3	8,511	4.5	71.0	441	0.3	3.7
	221	0.1	27.0	410	0.2	50.1	187	0.1	22.9
商品作物	72,265	41.7	47.6	28,801	15.3	18.9	50,850	39.2	33.5
椰子	35,615	20.6	66.5	6,356	3.4	11.9	11,585	8.9	21.6
ココナ	2,370	1.4	7.0	9,530	5.0	27.9	22,200	17.1	65.1
ゴツ	25,200	14.5	67.3	5,850	3.1	15.6	6,400	4.9	17.1
バナ	3,350	1.9	19.7	4,450	2.4	26.2	9,180	7.1	54.1
タバコ	4,880	2.8	63.2	1,820	1.0	23.6	1,015	0.8	13.2
甘藷	850	0.5	42.6	675	0.3	33.8	470	0.4	23.6
	-	-	-	120	0.1	100.0	-	-	-
計	173,254	100.0	35.2	188,769	100.0	38.4	129,695	100.0	26.4

注 1. 商品作物は住民農業のみ。

2. ゴダックは各県の作付割合のとくに大きいもの。

イタリックは作物ごとの州内での比重の最も大きいものを示す。

ランボンの農業は、米およびコーヒーを中心とした市場指向的な経営がかなり比重をもつと言えよう。これに対して中部ランボンでは、米、とうもろこし、ジャコサバによる自給的農業を主体とし、北部ランボンは、こしょうの商品化と自給的畑作農業の地帯と言うことができる。

これらの作付パターンの差は、当然のことながら、自然的条件の差異に大きく依存している。ランボン州の地形は、南西部に標高二千メートル前後の山岳が連なり、この山岳地帯から西の海岸までは急傾斜面を作っているが、東および北東に向かつては中央部から平坦地が続き、東海岸沿いに湿地帯がひろがる。この湿地帯はその北方、南スマトラ州のバレンパンの周辺、オガン河、コメリン河流域の広大な湿地帯に連なる。西部山岳高原地帯はアンドソル(Andoso)地帯で、土壌的に恵まれた肥沃な地帯である。とくに山岳の西側には、一八八三年のクラカタウ島の爆発による火山灰の堆積によって土層も厚く、とくに地味が肥沃で、南部ランボンでの土地生産性の高さの一要因がこれに由来している。輸出作物として最も重要なコー

第7表 年降雨量の変動

(単位: mm)

	南部ランボン	中部ランボン	北部ランボン
1961	1,022	1,593	1,845
62	1,385	2,012	1,560
63	1,383	1,617	1,460
64	794	2,472	2,298
65	1,157	1,446	1,625
66	1,509	1,149	2,427
67	1,609	647	2,010
68	974	1,108	3,090
69	1,171	2,327	2,479
70	1,506	2,280	2,550
平均	1,251	1,665	2,134
変動係数	20.3	34.3	23.2

注. 南部ランボン, 北部ランボンについては, Departemen Pertanian, Laporan Survey Potensi Pengembangan Pengairan Pedesaan di Propinsi Lampung, Agustus 1971 による。

中部ランボンについては Dinas Pertanian Rakjat, Propinsi Lampung, Some Data of Ketjamatan Trimurdjo, Kabupaten Lampung Tengah, Propinsi Lampung—The Location for "Tani Makmur Project" による。

ヒーは、排水が良好で土層の深い、肥沃な有機質の多い火山質土壌に最も適しているので、北部ランボンのスンベルジャヤから南、南部ランボンの高原地帯に集中している。

ランボン州の河川はおおむね西部山岳地帯を水源とし、中央平原を東に流れてジャワ海に注ぐ。主な河川に北からツランバ

ワン、スプティ、スカンボンなどがあり、これらの河川を利用して灌漑水田が作られている。オランダ時代、一九二〇年代には、スカンボン河の上流を堰止め、南部ランボン県タランパダンの下流盆地に灌漑施設を設け、ジャワ島農民を組織的に移住させている。南部ランボンにはその他に山添いの低地に水田が拓かれているが、比較的ジャワから移り易く、かつ土質、降雨に恵まれ、生産力が高いことがその要因と考えられる。中部ランボンでは、一九三五年にスカンボン河を堰止め、アルゴグルムダムを作り、その下流トリムルジョで三つの幹線水路に分水し、メトロ周辺の耕地約二万ヘクタールを灌漑している。

この地域の灌漑水田は、スプティ河、スカンボン河およびこれらの支流の河川によってさらに拡大されようとしているが、南部と異なりラトソル Inosol とポドソル Podosol の混合土壌で地力がやや劣るのみならず、水の管理が不十分な上に、降雨量の年次変動が著しいので(第七表)、水稻の収量は不安定である。なお、東南部のスリバオノ(中部ランボン)、タンジユンガン、カリアンダ(南部ランボン)一帯は古い火山灰の風化土壌で、西部には及ばないが地味は肥沃である。この地区にはランボン族が多く居住し、スリバオノではこしょう、カリアンダではコーヒーなど地質に敏感な作物が栽培されている。北部ランボンでは中心地コタブミ周辺から西部山岳地帯にかけて

第8表 農業生産額の構成

	南部ランポン			中部ランポン			北部ランポン		
	生産額	構成比	ランポン州における比重	生産額	構成比	ランポン州における比重	生産額	構成比	ランポン州における比重
食糧作物	781	50.4	37.0	922	74.8	43.7	409	44.2	19.3
米	629	40.6	46.5	414	33.6	30.6	310	33.5	22.9
とうもろこし	53	3.4	26.5	126	10.2	63.0	21	2.3	10.5
ジャガイモ	44	2.8	10.7	309	25.1	75.2	58	6.3	14.1
甘藷	36	2.3	57.1	16	1.3	25.4	11	1.2	17.5
大豆	5	0.3	23.8	10	0.8	47.6	6	0.6	28.6
落花生	14	0.9	21.1	47	3.8	73.4	3	0.3	4.7
商用品作物	769	49.6	48.2	310	25.2	19.4	516	55.8	32.4
コーヒー	354	22.8	61.3	62	5.0	10.7	162	17.5	28.0
ココナツ	14	0.9	5.4	71	5.8	27.5	173	18.7	67.1
ゴゴ	40	2.6	19.6	50	4.1	24.5	114	12.3	55.9
合 計	1,550	100.0	41.8	1,232	100.0	33.2	925	100.0	25.0

注. ゴデックは各県ごとの生産額の割合のとくに大きいもの。

イタリックは作物ごとの州内における比重の最大のものを示す。

はラトゾル地帯で、こしょう、コーヒーなどが作られているが、コタブミより北東の平原は地力も劣り、かつジャワからの連絡口である南のパンジャン港からも遠いこともあって、移住者も少なく、自給畑作とゴムの地帯となっている。なお、ランポン州のゴムの作付面積の五四%が北部に集中している。

以上のような作付パターンによって、各県での農業生産額の構成がきまってくる。食糧作物に比し、価値生産力の高い商品作物⁽¹⁾にかなりの耕地を割いている南部ランポンでは、食糧作物生産額と商品作物生産額はほぼ拮抗している。これに対し、中部ランポンでは食糧作物に集中し、生産額の七五%がこれによって占められる。また北部ランポンでは、商品作物の作付の比重は中部ランポンの場合よりも大きく、かつ土地生産力、それに価値生産力としても低い陸稲が食糧作物生産の中心であるため、商品作物生産額は食糧作物生産額を少しばかり上回っている。

なお南部ランポンの食糧生産は、その作付面積が小さいにもかかわらず、中部ランポンでの生産額にほぼ等しい生産額をあげている。これは地力の差、ならびに南部ランポンの食糧生産が水稻を中心としていることによるものである(第八表)。

注(一) 南部ランポンの主要な商品作物であるコーヒー、丁字などはとくに價格的に有利な作物である。

第9表 食糧作物作付構成の変化

	南部ランボン			中部ランボン			北部ランボン		
	1965 (A)	1970 (B)	B-A	1965 (A)	1970 (B)	B-A	1965 (A)	1970 (B)	B-A
収 穫 面 積 (千ha)									
食 糧 水 陸 上 米	87.0	99.4	12.4	149.0	158.4	9.4	73.3	75.8	2.5
稲	65.3	71.8	1.5	76.1	82.1	6.0	49.6	61.8	12.2
と 落 所	35.5	37.6	2.1	19.6	29.3	9.7	6.5	9.1	2.6
作 付 食 糧 水 陸 上 米	29.8	34.2	4.4	56.5	52.8	-3.7	43.1	52.7	9.6
稲	9.4	16.1	6.7	29.0	39.6	10.6	13.4	8.2	-5.2
と 落 所	4.8	4.8	-	23.2	25.4	2.2	5.3	4.2	-1.1
作 付 食 糧 水 陸 上 米	1.1	0.8	-0.3	0.5	1.5	1.0	1.9	0.6	-1.3
稲	6.4	5.9	-0.5	20.2	9.8	-10.4	3.1	1.0	-2.1
作 付 食 糧 水 陸 上 米									
稲	100	100		100	100		100	100	
と 落 所	75	72		51	52		68	82	
作 付 食 糧 水 陸 上 米	41	38		13	19		9	12	
稲	34	34		38	33		59	70	
と 落 所	11	16		19	25		18	11	
作 付 食 糧 水 陸 上 米	5	5		16	16		7	5	
稲	1	1		0	1		3	1	
と 落 所	8	6		14	6		4	1	

三、ランボン州農業の生産力

第六、第八表で明らかなように、ランボン州の食糧作物の生産の中で、作付面積についてはその四七%が、その生産額では四四%が、中部ランボンによって分担されているのであるが、主要な食糧である米については、その生産量の四六%余りが南部ランボンで生産され、中部ランボンは三一%弱を担うにとどまっている。中部ランボンは、水稻、陸稲を合わせて、ランボン州稲作面積の三八%を占め、南部ランボンの三三%を凌駕しているにもかかわらず、生産量において南部ランボンが半分近くを占めているのは、地力の差ならびに水稻作の比重による結果である。

しかしながら、過去五カ年間に現われた食糧作物の作付の変化は、南部ランボンの稲作の地位が相対的に低下し、中部ランボンの地位、とくに水稻作の地位の向上を物語っている。第九表に示すように、南部ランボンにおける食糧作物の作付面積の拡大は他の二県のそれを上回る。しかし、この作付の増大に最も大きく寄与しているのはとうもろこしであり、ついで陸稲である。このことは人口増加に伴う食糧生産の増大への圧力が、丘陵の多い南部ランボンでは、耕地の拡大を畑地に求めざるを得ないことを示している。そしてまた輸出需要の増大に刺激さ

第10表 米の需給(1965年と1970年の比較)

	人 口	需 要 量 (粍)				生産量(粍)		過 不 足 B-A	B/C	B/A
		1) 消費 (C)	2) 種子 (D)	3) その他 (E)	計 (A)	総 数 (B)	人 1 人 当 り kg			
	千人	千トン	千トン	千トン	千トン	千トン		千トン	%	%
1965年										
南 部	1,029.4	197.6	3.0	31.4	232.0	214.6	208	-17.4	108.6	92.5
中 部	636.7	122.2	4.2	17.3	143.7	111.5	175	-32.2	91.2	77.6
北 部	432.6	83.1	2.9	12.7	98.7	85.8	198	-12.9	103.2	86.9
ランボン州	2,098.7	402.9	10.1	61.4	474.4	411.9	196	-62.5	102.2	86.8
1970年										
南 部	1,258.4	241.6	3.4	31.9	276.9	197.9	157	-79.0	81.9	71.5
中 部	959.2	184.2	4.3	22.2	210.7	130.4	136	-80.3	70.8	61.9
北 部	455.5	87.5	3.7	14.1	105.3	97.6	214	- 7.7	111.5	92.7
ランボン州	2,673.1	513.3	11.4	68.2	592.9	425.9	159	-167.0	53.0	71.8

注: 1) 1人当たり 192 kg を目標とする。実際の消費量はこの7割程度と考えられる。

2) 水稻では32.25kg/ha、陸稲では62.25kg/ha として計算。

3) バッファストック(消費量の5%)、減耗(生産量の10%)。

れたともうもち生産の拡大が、これに相い伴ったものと見てよいであろう。また北部ランボンでも、人口の増大が作付地の外延的拡大のみならず、とうもちこし、キャッサバの作付の陸稲への転換と、一部の水田化を促進している。これに対して中部ランボンでは、とうもちこし、落花生などの商品性の比較的高い作物の作付増大と、陸稲の急速な水稻への転換が実現しつつあるのである。いうまでもなく、この水稻作の増大はさきに述べた灌漑投資の中部ランボンへの集中と関連していると思われることができる。

このような傾向は、一般的に言って、耕地に対する人口圧力の増大の結果とみることができるが、中部ランボンでは、灌漑投資によって、陸稲から水稻への作付転換、稲作生産力の増大による作付の多様化、という新しい発展の萌芽が見られるようである。もちろん、とうもちこしにせよ、落花生にせよ、価格条件によってその生産規模はかなり左右されるものと考えなければならぬし、第一〇表にみるように、中部ランボンの稲作による人口扶養力はむしろ相対的に減退している点を考えれば、上記の傾向が完全に定着したとは言いがたい。しかし、第一一表に示すように、中部ランボンの農業、とくにその稲作生産においては、ほぼ人口の増大に見合う水稻の収穫面積の拡大と、僅かではあるが、単位面積当たり収量を増大させていることが、

第11表 人口増加と稲作の伸び(1965~1970年の変化)

(単位: %)

	人口の 増 加	稲 作 の 伸 び			水 稲 作 の 伸 び		
		収穫面積	収 量	生産量	収穫面積	収 量	生産量
南 部	122	104	83	92	104	96	100
中 部	151	93	104	97	157	104	164
北 部	105	132	83	109	122	95	116
ラ ン ポ ン 州	127	106	92	97	120	97	116

注. 稲作, 水稲作の伸びは1965~67年平均と1968~70年平均による傾向線の外挿によって1965, 1970年の値を求め計測した。

陸稲面積の減少をかなり補っており, その陸稲面積をとうもろこし等に転換させる結果を招来していると言えるであろう。

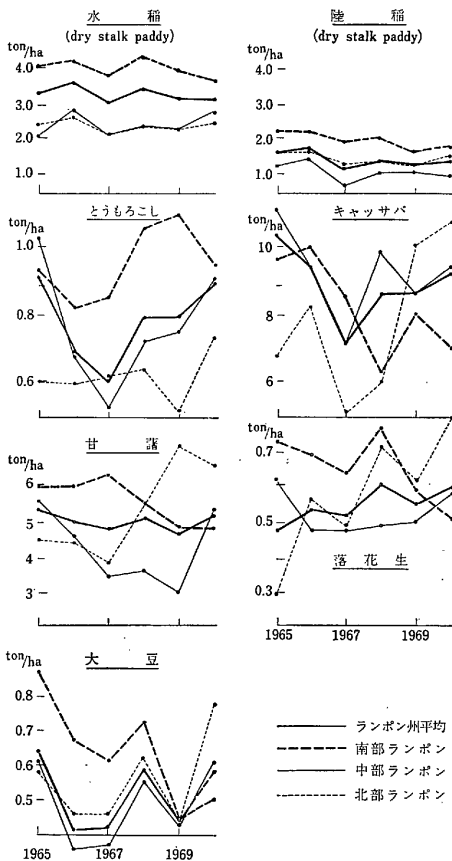
ランボン州の稲作は、従来は自然の豊度に大きく依存していた南部ランボンの稲作によって代表されて来たが、これからは資本の投下によって自然の豊度に変替して行くことが必要となる。中部ランボンの稲作はその意味でも重要な役割を果たすこととなる。なお第一図に示される傾向から判断すると、食糧作物生産に関する限り、

南部ランボンにおける地力の全般的な低下傾向が現われはじめたと見ることができよう。この点から見てもランボン州の農業、とくに食糧作物生産の質的な転換期が到来したと考えられる。

なお、第一図で明らかなように、中部ランボンの主要作物である水稲、陸稲、とうもろこし、落花生などの単位面積当たり収量の水準は、何れも州の平均を下回る。ただ、最近とうもろこしの収量が改善されて来ており、州平均を上回る勢いにあるが、これは、とうもろこしの農園経営、とくにP・T・ミツゴロ(三井物産の現地合弁会社)による改良品種の導入とその普及によるものであろう。何れにしても主要作物に関する限り、その土地生産性は州平均を下回り、かつ人口土地比率の上昇傾向を考えれば、労働生産性もまた低位に位することになる。

第二図はランボン州の各県農業の土地生産性、労働生産性の相対的比較と、ジャワの農業とランボン農業の生産性の相対的位置を示すものであるが、中部ランボンの農業は商品生産の比重が軽く、かつ人口土地比率が大きいという関係から、比較的商品作物生産に傾斜しているランボンの農業の中では、ジャワ島の農業と同じような性格をもち、相い似た関係位置にあることが知られる。しかし、この関係を食糧作物に限ってみるならば、中部ランボン農業の土地生産性は、水稲作の拡大、とうもろこしの収量増大等を反映して、若干その相対的地位を改善さ

第1図 ヘクタール当たりの収量推移

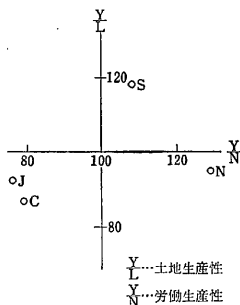


せてはいるものの、人口の流入によって労働生産性は逆に低下している。この点、ジャワ島では、最近の生産の拡大が、土地生産性の上昇によって明白に示されるのみならず、労働生産性の改善をも結果しているのと、対照的な動きを中部のラン

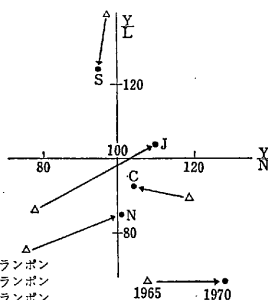
ボンでは指摘しなければならない。
このように、ランボン州農業の生産力の水準、その変化の傾向から判断すると、大雑把にいうならば、ランボン州の農業は未だ自然の豊度に依存する度合が強く、漸く自然に代替する資

第2図 ランボン各県農業生産性の比較
(ランボン州平均=100)

農業生産 (1970年)



食糧生産 (1965, 1970年)



本の投入と、それに伴う生産力の発展がその緒に就きはじめた段階と見てよいであろう。一九三〇年代における中部ランボンでの灌漑施設の導入と組織的な移民は、従来の土壌条件と水とに比較的恵まれた地域、とくに南部ランボンへの移民の流入という開発初期の姿に対して、水利に対する資本投下による耕地の外延的拡大、移民の受け入れによる労働力投入、これらによって生産の拡大を実現したものではあるが、最近における灌漑施設の拡充は、単に移民の受け入れを可能にしているだけでなく、新しい改良品種の導入と、肥料などの近代的投入への契機を生みつつあると見られるからである。

南部ランボンの水田のうち、いわゆる技術的水利施設をもった水田 (sawah dengan pengiran teknis) は二七%にすぎないが、農民が自力で小規模に作ったいわゆる sawah pengiran biasa の割合は四一%を越えており、比較的豊富で、しかも年変動の少ない降雨にめぐまれ、二四%も占める天水田も有効に使われていると思われる。これに対し、中部ランボンでは、灌漑水田のほとんどが技術的灌漑によるものではあるが、水管理の不備、あるいは降雨の年変動の大きさは、その機能を十分に発揮させていないと言える。水利条件からみれば、南部ランボンと中部ランボンの何れを良しとするかは簡単には判断し得ないが、中部ランボンに一般的な水利条件は、最近の近代的投入

第12表 肥料と優良種子を使用した農民の割合

(単位: %)

	中部ランポン (ヨンダディ村)		南部ランポン (グスングサリ村)	
	肥料	優良種子	肥料	優良種子
1960年以前	15	11	0	0
1960~64	33	37	0	0
1964~68	52	56	3	0

出所: Survey Agro Ekonomi, Departemen Pertanian, *Aspek². Intensifikasi Padi Sawah di Dua Kabupaten di Lampung Musim Hudjan 1968/69*, 1970, p. 25.

あるいは改良品種の導入も、目下のところ中部ランポンが若干進んでいる。第一二表は事例調査によるものではあるが、南部、中部何れにしても新技術の利用度は低いと言わざるを得ないが、南部ランポンでは、肥料の使用がその土地の肥沃度に適合せず、稲の不作の要因となったために、農民は肥料の使用を嫌っている、と報告されている⁽¹⁾。なお、第一三表に示すように、新しい技術水準の指標と考えられる施肥、あるいは新品種の導入、二

の増加を伴った新しい技術の導入の基盤となり得る。ランポン州の稲作における新技術の導入は、必ずしも積極的に農民に受け入れられていると言ったものではないのが現状である。とくに南部ランポンでは自然の豊度への依存が強く、肥料の投入

期作等の比率は、南部ランポンにおいて劣っている。反面、一見相対的には技術水準が高いように思われる中部ランポンは、収量水準において依然として南部ランポンには及ばない。それは陸稲の収量差に見られるような自然の肥沃度に由来するところが大きく、未だ技術的にとくに抜きんでいると言うまでには至っていないことを示すものであろう。

しかし、メトロ周辺の二郡(Kelamatan)についての聞き取り調査の結果を整理すると、中部ランポンの内部では、明らかに水利条件の整備が新しい技術の導入を誘引していることが出来る。さき最近のジャワからの移民の流入が中部ランポンにかなり集中していることを示したが、戦後中部ランポンに流入した移民の多くは、水利施設のない原野の開拓地に入植させられたものである。一九五二年から一九七〇年までの一九年間に、中部ランポンには一七万人の移民が移り住むようになったが、その入植地一六万三千ヘクタールのうち、現在までに、スカンボン、ブルボリンゴ、ベカロンガン、ラーマンウタラ、ならびにブングウルの一部など、わずかに約三万ヘクタール、二〇%足らずの地域に水利施設が整備されているにすぎない(第一四表)。つまり過去二〇年間の中部ランポンへの入植者一七万人の八割は、原野を開拓した耕地に、陸稲、とうもろこし、キャッサバなどの自給生産を継続しており、その生産力

第13表 稲作技術水準の比較

	中 部 ラ ン ボ ン				南 部 ランボン
	A ¹⁾	B ²⁾	C ³⁾	県 平 均	平 均
耕地面積 ⁴⁾ (千ha)(a)	18.3	7.6	21.1	97.1	69.1
水田面積 ⁵⁾ (千ha)(b)	10.3	4.2	1.8	20.4	34.9
水利施設のある水田 (千ha)(c)	9.4	3.8	0.7	14.8	9.6
b/a (%)	56.3	55.3	8.5	21.0	50.5
c/b (%)	91.3	89.5	38.9	72.5	27.4
食糧作物収獲面積 (千ha)	25.3	11.0	26.3	158.4	99.4
うち水稲雨期作 (%)	43.8	35.5	8.2	14.1	50.5
水稲乾期作 (%)	26.4	16.7	2.2	4.4	7.4
陸 稲 (%)	5.0	13.6	22.9	33.3	34.4
ヘクタール当たり収量 ⁷⁾ (stalk paddy ton/ha)					
水稲雨期作	3.4	3.6	1.4	} 2.8	3.9
水稲乾期作	2.4	2.9	1.4		3.1
陸 稲	0.9	1.0	0.9	0.9	1.7
稲作灌漑比率 ⁸⁾ (%)	91.2	73.4	14.6	26.4	23.5
稲作二期作比率 ⁹⁾ (%)	61.8	46.0	34.1	30.9	24.2
改良品種導入率 ¹⁰⁾ (%)	35.6	45.4	27.1	28.5	8.9
施肥水準 ¹¹⁾ (kg/ha)					
尿 素	128	63	19	113	8
T. S. P.	66	100	13	37	3
施肥面積割合 ¹²⁾ (%)	30	25	5	-	-

注. 1) 1950年以前の入植地…Metro, Trimurdjo, Batanghari, Sekampung, Pekalongan.

2) 1950年以降の入植地で水利施設のある所…Purbolinggo, Raman Utara.

3) 1950年以降の入植地で水利施設の不備な所…Sekadana, Seputih Raman, Punggur, Gunugsugih.

4) 水田, 普通畑, 永年作畑の合計.

5) 灌漑水田, 天水田, 沼沢田の合計.

6) 技術的灌漑施設のある水田. Sawah dengan pengairan tehnik.

7) A. B. C. については聞き取り調査によるKetjamatan別標準収量の算術平均.

8) 灌漑水田での作付面積(雨期乾期とも)の稲作付面積に対する割合. 県平均値については乾期作はすべて灌漑水田に作付けられたものとして推計.

9) 乾期作面積の雨期作面積に対する割合.

10) 改良品種. PB-5. C4-63, 295, Syntha の作付割合.

11) A. B. C. については聞き取り調査による Ketjamatan 別ヘクタール当たり施肥量の算術平均. 県平均値は県内販売量を作付面積で除した数値. 1969, 70 年平均. したがって A. B. C とは比較出来ない.

12) 聞き取り調査による Ketjamatan 別概数の算術平均.

出所: 聞き取り調査によるもの他はDinas Pertanian Rakjat(Lampung Tengan および Lampung Selatan) の資料による.

第14表 ランボン州移住管理事務所管理地域内における移住民入植状況
(1952年より1970年12月に至る)

移 住 地 名 称	開 設 年 度	面 積 ha	入 植 数	
			世 帯	人 数
南部ランボン				人
パ ラ ス	1958~1963	14,300	1,412	6,064
シ ド ム ル ジ ョ	1958~1967	15,000	2,628	11,120
バ ラ ウ タ ダ ト ン	1961~1964	12,000	765	3,042
タ ン ジ ユ ン ガ ン	1968	1,000	302	1,405
合 計		42,300	5,107	21,631
中部ランボン				
ス カ ソ ン	1952~1955	3,000	1,237	5,744
ブ ル ボ リ ン ゴ	1952~1956	10,000	3,613	14,415
ブ ン グ ウ ル	1953~1957	10,000	2,511	9,703
ベ カ ロ ン ガ ン	1953~1957	1,000	545	2,351
ラ ブ ア ン マ リ ン ガ イ	1953~1956	142	201	771
ス プ テ イ ラ ー マ ン	1954~1959	12,630	5,390	22,172
ラ ー マ ン ウ タ ラ	1955~1958	9,958	2,904	12,029
ワ イ ス プ テ イ	1954~1961	10,537	4,298	17,778
ス プ テ イ バ ン ジ ャ	1958~1961	19,180	5,000	19,720
リ ン ビ ア バ ラ	1960~1961	4,727	1,003	3,919
ス プ テ イ ナ ブ ン	1964~1964	10,000	996	14,619
フ プ テ イ ス ラ バ ヤ	1965		2,998	12,408
ワ イ ジ ャ マ ラ ム	1957~1963	11,689	3,992	16,491
ス プ テ イ マ タ ラ ム	1962~1965	38,000	6,806	28,752
ル ム プ ジ ャ ン	1959~1959	12,000	266	954
バ ン ジ ャ ラ ツ	1959~1967	10,000	551	2,186
合 計		162,863	42,311	174,012
北部ランボン				
バ ラ ダ ツ	1959~1963	17,500	1,510	6,496
ス ゲ リ ア グ ン	1965~1965	8,500	1,818	7,643
パ ニ ジ イ ト	1962~1963		1,084	4,917
ワ イ ア ブ ン	1965~1970	20,000	1,777	7,482
合 計		46,000	6,189	26,538
要 約				
南 部 ラ ン ボ ン	1958~1968	42,300	5,107	21,631
中 部 ラ ン ボ ン	1952~1967	162,863	42,311	174,012
北 部 ラ ン ボ ン	1959~1970	46,000	6,189	26,538
総 計		251,163	53,607	222,181

出所：ランボン州移住管理事務所。

の水準は、第一三表のC欄（スカダナ、スプティラーマン、プングウル、クスングスギの四郡平均）に示されるようなもの、あるいはそれ以下の水準にとどまっているとみられる。これらの地域は一九五〇年以降の入植地であり、しかも県都メトロから遠く離れ、道路の不備によって、より劣悪な経済的条件を甘受せざるを得ないのである。

同じ一九五〇年以降の入植地であっても、水利施設の整備が進んでいるプルボリンゴ、ラーマンウタラ（第一三表のB欄）では、一九五〇年以前の入植地で水利の比較的良好な稲作中心地（第一三表のA欄）とほぼ同じ水準の生産力を示しており、新しい技術が同じように導入されているものと見られる。しかし、B地区はA地区に比し水利条件は若干劣り、稲作灌漑比率、二期作比率に差が生じている。これは末端水路の未整備、水管理の不完全さによる灌漑水のロスなどに起因するが、陸稲の水稲への転換、商品性を高めたとうもろこしの二期作化などが進行しているのも、この地域およびさらに周辺のC地区である。

注(一) Survey Agro Ekonomi, Departemen Pertanian, *Aspek Intensifikasi Padi Sawah di Dua Kabupaten di Lampung Musim Hujan 1968/69, 1970*, pp. 25-27.

四、ランポン州の農業構造

中部ランポンの農業は、水利施設の整備拡充を契機として、新しい技術の導入、そして生産力上昇への方向に踏み出しているかに見える。水田の乏しい入植農民が水田の拡大を切に希望しているのは、彼等が水田地帯であるジャワ島から移り住んだことによることは言うまでもないが、水稻の生産力の高さと安定性、そしてそれによる収益の増大である。つまり社会的に人口密度が増大し、外部経済が発達するにつれて、灌漑という手段を通ずる技術変化によってこれに対応するのである。しかしそのような技術変化による生産力の拡大が、再び人口密度の増大に充分に応えられなくなると、より集約化した土地利用が考慮されなければならない。その場合、農業労働力の非農業部門への吸収が明らかに限定されていると見なければならぬ。中部ランポンのような地域では、新しい技術は従来の労働集約的技術の効率を高めて行くようなものでなくてはならないであろう。これが新しい技術としての高収量品種であり肥料の投入である。しかし、ランポン州の農民がこの新しい技術によってより高い生産力水準に到達するには、いくつかの基本的な困難がある。

一つは新しい技術の提供のされ方と、これを受ける側での技術的条件である。現に提供されている技術は、主としてビマス

第15表 農民と農業指導者との接触頻度

(1968/69年雨期)

(単位: %)

	中部ランポン の事例		南部ランポン の事例	
	I	II	I	II
郡農業普及員	26	3	6	5
村農業普及員	-	23	43	14
村の指導者	17	20	-	14
村の指導者	10	14	37	30
農民	20	-	7	-
接触なし	27	40	7	20

出所: Survey Agro Ekonomi, Departemen Pertanian. *Aspek² Intensifikasi Padi Sawah di Dua Kabupaten di Lampung Musim Hujan 1968/69*, 1970, p. 35.

計画を通ずるものと言ってよい。これは全く画一的なものであって、必ずしも現地適応性について充分検討されたものとは言えない。また biomass 計画の主要内容とするパッケージされた生産財の投入が、実際にはその供給が必ずしもうまくバランスされていらない。現地における輸送条件の劣悪さが、適期の投入に間に合うような生産財の供給を妨げているからである。

また受け入れ側の技術条件としては、基本的には掛け流し灌

漑が肥料の効率を減殺し、またそのための深植えが新品種の特性を殺していることである。また普及ないし指導力の乏しさもまた技術的欠陥の一つとしてよいであろう。第一五表に示されるように、技術的情報の入手先は主として村内にある。その中心である村長にしても、村の普及員にしても、技術的知識に信頼を置ける程度は限られよう。またその知識の供給源の役割をもつ郡の普及員とは、ステータスの障害があるのみならず、距離の障害がある。たまたま郡の事務所からの距離が五キロメートルにすぎなかった中部ランポンでの例では、郡の普及員への接触頻度が二六%にもなったが、その距離が一〜一五キロメートルであった南部ランポンでは、その接触頻度はわずかに五〜六%にすぎなかったのである。(1)

第二に、農民の意思決定に際しての選択基準の問題がある。一般に農民、とくに停滞的な農業の中に生活している農民は、新しい経済的機会の中に新しい選択を求めるという態度に欠けている。つまり従来からの経験の中に機会選択の基準を求めるために、新しい試みがなされる場合には、未知のものにきわめて大きなリスクを感じ、そのリスクを出来るだけ避けて通ろうとする。したがって新しい技術、しかも旧来の技術に比しコストの増嵩を必然とするものを導入するに際しては、考えられる危険負担の軽減について何等かの保証があること、そして基本

第16表 ランボン州における米の需給
(単位: トン)

	DELOG ¹⁾ による 米の買入	DELOG による 米の輸入	ランボ ン州の 出 か 輸
1967	11,924	2,168	4,942
1968	26,710	3,606	9,000
1969	669	735	3,613
1970	1,073	7,250	2,243

注. 1) Depot Logistik Lampung (ランボン食糧調達所).

出所: Depot Logistik Lampung.

的には追加的な投入に対して、かなり大きな収益が十分に期待できることが必要である。しかし、比較的教育の程度が高いとみられる若い農民の方が、年寄りに比して新しい技術により積極的な反応を示していることが実証されているので、積極的な普及教育活動が農民の意思決定に有効な働きをするものと思われる。

また収益の期待には市場の安定性が大きく作用する。市場が不安定であれば、当然追加的投入を差し控えるであろうし、増加しつつある労働力はむしろ積極的に他に雇用の機会を見いだすことに努めるであ

ろう。インドネシアにおける新技術の導入、そして米の増産への経済的誘因として、しばしば米の生産者価格の引き上げが強調される。現在 BULOG (食糧調達所) は最低価格を一キロ当たり叔 (Gulak paddy) 一三・二ル

ピア (農家庭先価格)、良質米 (碎米率二二・五%以下) 三八ルピア (市場価格) に支持しているが、むしろ BULOG の機能は、市場価格が五〇ルピアを越えるとき在庫を放出して市場の鎮静を図るところにある (第一六表)。最近輸入米の市場放出などにより米価はきわめて安定化しているが、このことは生産者にとっては、相対的に不利な価格条件が作り出されたことになる。すなわち最近における食糧以外の生活物資の価格上昇もさることながら、現在なお高価な肥料・農薬 (尿素一キロの市場価格は三〇ルピアであるが、農民の手許に入る時は四〇ルピア以上にもなっているし、農薬も一リットル当たり一、一〇〇と一、二〇〇ルピアである) の使用量が増加しているからである。

なお、中部ランボンにおける肥料のヘクタール当たり消費量は、過去五カ年間に三・八倍に増加している。また道路等交通輸送条件の欠陥によって、中間商人 (tengkulak) の介入に有利な条件がつくられ、それだけ農民にとっては、とくに市場に遠く離れた農民にとっては、一層不利益をもたらしことになる。さらに収穫期における生産物価格の下落による年間価格変動は、市場価格の相対的安定性にくらべると、これまた農民にとって不利益をもたらし、これらの傾向は第一七表に示す通りである。農業経営規模の零細性は市場における相対的な不利益を招来

第17表 穀生産者価格と米市場価格の季節変動
(中部ランボン、1970年)

	穀		米	
	Padi	Bulu	Giling	I
		Kp/kg		Kp/kg
1 月		15.90		51.50
2 月		19.40		48.20
3 月		15.20		41.90
4 月		13.50		44.21
5 月		16.20		40.27
6 月		19.00		42.57
7 月		19.00		47.50
8 月		22.30		51.30
9 月		18.50		52.45
10 月		21.80		50.00
11 月		16.00		43.57
12 月		25.30		43.00
平均		18.51		46.37
変動係数(%)		17.6		8.9

するだけではなく、技術的な改善に対しても抑止的な影響力をもつであろう。まさに中部ランボンにおける労働生産性の低下傾向を見た(第二図)。つまり人口土地比率の上昇が、土地生産性上昇傾向のもつ効果を著しく減殺しているわけである。一般的に言うならば、人口土地比率の上昇にしたがって、新しい技術に対する要求は増大するものと思われるが、まさに述べたような新しい技術の提供面での欠陥、相互雇用等(ゴトンヨロン Golong Rojong の慣習)による雇用機会の存在、未利用地

の存在などが、新しい技術の導入への積極性を抑えていると考えられる。また現に見られる人口土地比率——メトロ、トリムルジョなど水田地帯五郡では、その人口耕地比率は一〇・九、プルボリンゴ、ラーマンウタラの二郡では八・三、一九五〇年以降の入植地で水利施設の充分に整っていないスカダナなどの四郡では八・二と推定される——は、ジャワの農村のそれとかなり近い値を示すものと思われるが、これらの土地に対する人口圧力は、当面の生活の必要から、新しい投資をむしる困難にしているのである。なお上記の人口耕地比率の大きさは、一面には新しい土地の外延的拡大、雇用機会を期待しての滞留人口の存在をも意味しよう。

何れにしても、このような耕地に対する人口圧力の増大は、この地帯における経営の零細化を一層推し進めることになる。水田地帯五郡についてみると、一戸当たりの耕地面積は、水田〇・三〇ヘクタール、普通畑〇・一三ヘクタール、永年作畑〇・一九ヘクタール、合計〇・六二ヘクタールである。この他に遊休地が〇・〇九ヘクタールあるが、これは通常入植の場合、水田一ヘクタール、畑〇・五ヘクタール、永年作畑〇・二五ヘクタール、宅地〇・二五ヘクタールが割り当てられているのと比較すると、きわめて零細化してしまったと言えよう。なお、プルボリンゴ、ラーマンウタラの二郡では、一戸当たり耕地面

第18表 水稻作および畑作地帯の代表的作付パターン（1戸当たり）

				水 稻 作		畑 作	
				トリムルジョ郡		グスングスギ郡	
				ha	%	ha	%
水	田	面	積	0.50	—	0.08	—
うち	灌	漑	田	0.50	—	—	—
普	通	畑	面	0.02	—	0.81	—
収	穫	面	積	0.86	100	1.51	100
水陸とうき落大緑甘	水稻	雨乾	期	0.50	59	0.08	5
	水稻	雨乾	期	0.28	33	0.02	1
	水稻	雨乾	期	—	—	0.64	43
	水稻	雨乾	期	0.002	0	0.16	11
	水稻	雨乾	期	—	—	—	—
	水稻	雨乾	期	0.07	8	0.58	39
	水稻	雨乾	期	—	—	0.01	1
	水稻	雨乾	期	0.002	0	0.002	0
				—	—	0.003	0
				—	—	0.003	0

注. 聞き取り調査の結果による。耕地面積等に Kabupaten の統計とは若干相違したところがある。

積〇・八二ヘクタール、遊休地〇・四六ヘクタール、スカダナその他の四郡では、耕地〇・八四ヘクタール、遊休地〇・五八ヘクタールで（第一八表参照）、入植後比較的日の浅いほど資本および労働手段が不充份であり、かつ知識の乏しい農民にとつては、土地を充分に利用し得ないような状況におかれていることが示されている。またこのような地帯でも、水利施設の整備が進めば、メトロ周辺のような零細化が進行するであろうことも示唆している。

したがって、積極的に新しい技術による生産力の向上と、耕地の外延的拡大による再入植 *Resettlement* を考えない限り、耕地の零細化と貧困の深化とはますます進行することにならう。なお、メトロ郡ヨソダディ村の農家の規模別分布をジャワのそれと比較すると、両者の分布に類似性があるのに気付くであろう（第一九表）。また調査対象となつたいくつかの村での事例ではあるが、一戸当たりの耕地面積の最大規模は四ヘクタールで、反対の極にはかなりの数の土地をもたない農民が存在している。極端な例では、村の人口の六〇％が土地をもたない農業労働者という報告もあり（平均二〜三割程度と考えられる）、この点でもジャワにおける零細性、貧困性が、そのままランポン州まで拡大されて来たと言つてもよいであらう。

注(一) Survey Agro Ekonomi, Departemen Pertanian,

第19表 規模別農家戸数の分布

(単位: %)

	中部ランボン ヨンダディ村 ¹⁾	ジャワ マドゥラ ²⁾ I	ジャワ マドゥラ ³⁾ II
0.10~0.49ha	53.3	52.2	78.0
0.50~0.99	33.3	27.1	11.7
1.00~1.49	10.0	10.8	} 9.8
1.50~4.99	3.3	9.5	
5.00~	0	0.4	0.5

注. 1) 1968/69年雨期作, 水田面積規模別.

Survey Agro Ekonomi, *Aspek² Intensifikasi Padi Sawah di Dua Kabupaten di Lampung Musim Hujan 1968/69* による.

2) 耕地面積規模別. 1963年農業センサスによる.

3) 水田所有規模別. 1957年現在.

K. J. Peljzer, "Agricultural Foundation", in R. T. McVey ed., *Indonesia*, 1963, p. 127.

(4) の水田地帯での籾の生産者販売価格は平均二一Rp/kgであるが、スカダナ、ブングウル、グスングスギなど、メトロから離れた地域では一四Rp/kgであった。

人口耕地比率は、耕地一ヘクタール当たりの農家人口を以て示す。農家人口は聞き取り調査による郡別総人口に、総世帯数に対する農家戸数の割合を乗じて算出した。耕地面積は中部ランボン県農業事務所資料による。

Ibid., pp. 35~36.

(2) Survey Agro Ekonomi, Departemen Pertanian, *op. cit.*, p. 28.

(3) 聞き取り調査によれば、メトロ、トリムルジョなど